

四、パネリストによる問題提起(1)

歴史のなかのネーション——統合と分裂——

内田 健二

私は昨年シンポジウムで、「CISから見た民族と国家」と題して、不十分ではあるが、社会主義とナショナリズムの関係、およびCIS諸国の民族問題について論じた。それゆえ、その繰り返しを避けるとすれば、正直なところ、今回のシンポジウムで改めて議論に値する素材を提供する準備はできていない。しかし、私は学部のゼミで、学生に対して、たとえ発言する内容がないと思っても、質問でもよいから何とかひねりだして議論に加わるよう求めており、その手前、私も何とかお二人に質問するという形で、討論者としての責任を果たしたいと思う。ただ、興味深いご報告の後に粗雑な議論をすることに気がひけるが、質問の前に、私なりに民族(ネーション)の問題性について考えていることを述べさせて頂きたい。

すでに指摘されていることではあるが、ナショナリズムの基礎にある民族(ネーション)とは、相異なる二つの観念のうえに成立するシンボルである。それらは、すなわち、他者との共通性を主張する普遍性の観念と、他者との異質性を主張する特殊性の観念の二つであり、その結果、民族(ネーション)は統合と排除という二つのヴェクトルをもつシンボルとして機能してきた。しかもその際、安先生がシンポジウムの冒頭で述べられたように、民族(ネーション)は近代国家の成立を背景にして生まれたシンボルであり、本来的に国家と分かち難く結び付いていた。国民国家

(ネーション・ステイト) という概念、また、民族自決権という理念的価値が、このことを象徴的に示す。

民族がもつ統合と排除のヴェクトルは、ある人間集団がまとまって構成する政治単位(共同体)の規模という観点からみた場合、政治単位あるいはその領域を拡大し統合するという統合・拡大化の機能と、これとは逆に、政治単位あるいは領域を分割し細分化するという分裂・細分化の機能を、これまでの歴史において果たしてきた。統合と分裂のいずれが主たる機能となるかは、当然ながら、歴史的な時代状況によって異なる。

木戸先生はご報告のなかで、ナショナリズムの本質が本源的なものか、状況的なものか、という問いを提起され、状況的なものとして把える視点を示された。その言葉を借りれば、二つのヴェクトルのいずれが主たる機能となるかは、その時々々の状況によるという意味で、ヴェクトルの現れ方が状況的であるといえるのではないだろうか。統合のヴェクトルが主としてみられた事例は、一八〇一―一九世紀の西ヨーロッパにおけるネーション・ステイトの形成過程においてであろう。ここでは、商品経済の展開と国民経済の成立を背景として、様々な小規模の政治単位が、いくつかの少数の国家へと統合されたわけである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、国家統合を図る支配民族によって、少数民族(民族という言葉が適当でないとするれば、エスニック集団)が抑圧され、同化の対象とされたことである。梶田先生が詳細に論じられたように、イギリスにおけるウェールズ人とスコットランド人、フランスにおけるブルターニュ人とオクシタニー人、スペインにおけるバスク人とカタロニア人などを、その例として挙げることができる。そして、ネーションというシンボルは、支配民族が少数民族を抑圧し、国家統合を図るうえで有効であった。しかし、征服されたマイノリティー集団が完全に同化されたわけではなく、当時、成立したとされるネーション・ステイトは、内部に少数民族を抱えた国家であり、あくまでも擬制(フィクション)としてのネーション・ステイトであった。その結果、報告で詳しく述べ

られたように、そうしたマイノリティー集団は、現在、エスニック集団として自己主張を開始しており、彼らの主張と運動は、国家による統合という観点からみれば、遠心化・分裂のヴェクトルをもつに至っている。

東欧（あるいは中欧）と旧ソ連邦地域は、今述べた西ヨーロッパとは事情が異なる。第一次大戦から第二次大戦にかけての戦間期において、東欧・中欧でネーションが果たした主たる機能は、一八〇一―一九世紀の西ヨーロッパとはちょうど逆の分裂・細分化の機能であった。すなわち、オーストリア・ハンガリー帝国、ドイツおよびロシアという三つの帝国の崩壊によって、それらの国家領域が細分化され、多くの国家が誕生したのである。（ただし、ルーマニアについては、以前よりも国家領域が拡大しており、ネーションは統合・拡大化機能を果たしたといえるが、東欧・中欧全体としてみた場合、ネーションは分裂・細分化のヴェクトルをもったといつてよい。）しかし、戦間期の東欧において、ネーションは国家建設の原理として掲げられたものの、西ヨーロッパのように徹底して貫かれず、その結果、擬制としてのネーション・ステイトにも至らない多民族国家が生まれることになった。

その背景にあったのが、第一に、民族の混住という条件である。木戸先生が示された地図からも明らかのように、複数の民族が入り組んで居住しているこのような条件のもとでは、ある程度大きな領域をもった国家を想定した場合、そのなかに複数の民族が含まれるのは必然であった。第二の条件は、ドイツと革命ロシアを封じ込めようとしたヴェルサイユ体制の政治的目的である。とりわけ東欧（中欧）は、西ヨーロッパ世界にとって、革命ロシアの防波堤として地政学的に重要な位置づけをもった。この第二の政治的目的からすれば、あまりに細分化した国家よりも、ある程度の広がりをもった大きな国家の方が適当であろう。しかも、国外の脅威が存在するならば、国内の民族間紛争はあつて程度緩和され、副次的な性格をもつに留まるであろう。（もちろん、チェコのズデーテン地方のように、他国の支配的民族ドイツ人が居住する場合は別であるが。）

ヴェルサイユ体制のもとでの地政学的要因を背景にして成立した多民族国家の典型例が、チェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアである。これまで一度も統一した国家をもった経験のないチェコとスロヴァキアが合体してチェコスロヴァキアが形成され、また、バルカン半島の西部は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人その他を統合して、ユーゴスラヴィアが創出された。ここでは、ネーションのもつ分裂・細分化の機能が、地政学的要因という外在的要因によって抑えられたといえる。しかし、これら二つの国において、民族に代わる新たなネーション^{II}共同体的一体感をもった国民（チェコスロヴァキア人、ユーゴスラヴィア人）が創り出されたわけではなかった。したがって、多民族国家を成立させた外在的要因が消滅した場合、ネーションのもつ分裂・細分化のヴェクトルが働き始めるのも、ある意味では当然であった。

民族に代わる新たなネーションを創出できなかったということは、ソ連邦も同様である（東ドイツも同様）。もちろん、ソ連邦という多民族国家の成立は、戦間期の東欧・中欧とは異なり、旧ロシア帝国の領域を引き継いだという側面に加えて、それ以上に、社会主義のもつインタナショナルイズムの理念を背景としていた。この点は重要な相違として考慮しなければならないが、連邦国家にアイデンティティーをもつネーションを創出できなかった点は変わりがない。ソ連邦においては、ブレジネフ時代、諸民族の「接近と融合」が説かれ、「ソヴェト人」（ソヴェーツキー・ナロード）という新たなネーションの創出が目指されたが、ソ連邦崩壊という事態に示されたように、失敗に終わった。ソ連邦崩壊後の現在、旧ソ連圏と東欧地域で生じている事態は、戦間期において、徹底して貫かれなかったネーションの分裂・細分化機能が、爆発的な形で表出していることを示す。いわば、一八〇一―一九世紀の西ヨーロッパの経験が一世紀以上も後になって繰り返されているとあってよい。しかも、それが、多民族の混住という地域で、さらに、近代的兵器によって飛躍的に強化された軍事力を背景として繰り返えされている点に、一層の悲劇性が存在する。旧ソ

連邦のような多民族の混住地域においては、多数派民族のナショナリズムによる国家（主権単位）の細分化は、国家の果てしない極小化をもたらすだけだからである。

しかし、梶田先生のご報告で明らかにされたように、国民という集団が地域ごとに分裂するという状況は、旧ソ連邦圏と東欧地域に限られているわけではなく、形を変えてではあるが、西ヨーロッパと北米地域の先進諸国においてもみられる。ここでは、一旦は成立したと思われたネーション（国民≡民族）の内部に、様々なエスニック集団が、強い一体感をもって政治の舞台に登場し、極端な場合には既存の国家からの分離・独立を含め、地域主義や文化的自治などの多様な要求を突きつけている。言い換えれば、ネーションというシンボルは、かつてネーション・ステイト形成の際に果たした統合・拡大化の機能を、もはやもちえなくなりつつある。

ネーション≡国民というシンボルに挑戦するそれらの集団を、民族と呼ぶか、あるいはエスニック集団と呼ぶかという概念に関わる問題を別にすれば、かつての東西両世界が抱える問題は、ネーションというシンボルが、国民を統合するうえで統合・拡大化機能をもちえなくなったという点で、基本的に同じ性格を共有するといつてよいのではないだろうか。東西両世界における民族問題とエスニック問題の現れ方、現象形態は質的に異なるとはいえ、いずれの場合においても、ネーションは国民統合のシンボルとはなりえず、逆に、国民を分裂させ、政治単位を縮小させる分裂・細分化機能を果たしているのではないだろうか。

そうだとすると、旧ソ連邦・東欧における事態は、単に一八〇―一九世紀の西ヨーロッパが経験した問題に留まらず、現代の先進諸国が直面する問題をも悲劇的な形で示していることになる。社会主義諸国において、社会主義イデオロギーと独特の社会システム・生活様式に基づいて、民族に代わる新たなネーション≡国民を創出しようとした試みが失敗したことで、先進資本主義諸国において、自由民主主義イデオロギーと西欧型生活様式（典型的にはアメリカ的

生活様式)に基づいてネーション＝国民を創出する試みが危機に直面していることとは、通底しているといつてよいように思われる。

ついでながら、たとえば、ロシアにおける国民の分裂と、西欧社会における国民の分裂は、地域主義という点でも共通性をもつ。梶田先生は西欧の地域主義が国家の枠を越えて、トランスナショナルな結び付きをもちつつある点を強調された。ロシアにおいても、これと同様に、たとえば環日本海経済圏とシベリアとの結びつきにみられるように、トランスナショナルな結合を求める動きが存在する。この点においても、旧ソ連邦における事態は、現代的な問題状況を反映しているといつてよい。

こうした状況は、我々が生きている現代という時代の問題状況と密接に関連する。いわゆる社会主義の崩壊と冷戦構造の終焉は、説明を省いて結論だけをいえば、強力な国家の存在(それゆえ国民という一体感をもった集団の存在)を是とし、自明視するレゾン・デタの時代が終わりつつあることを示している。ご報告にあったEUという超国家的機構の誕生も、このことを示す。国家の枠組みが前提とされないとすれば、民族・エスニック紛争の激発という現象も、ある意味でそれほど奇異な現象ではない。なぜなら、人々が第一義的にアイデンティティーの対象とする組織・集団が、国家以外のものに拡散したからである。この意味で、現代はアイデンティティー・クライシスの時代であり、民族・エスニック紛争はその産物であるともいえるのではないか。

これは国家という観点からみれば、「国家の危機」である。ロシアにおいて、「国家体制(gosudarstvennost', statehood)の危機」が叫ばれて久しいが、このことは、国家が国民の忠誠を確保できず、国家としての枠組みが危機に瀕していることを象徴的に物語る。しかし、擬人的な言い方をすれば、危機に直面した国家が、そのまま手をこまねいていることは考えにくい。何らかの反動が起こることは十分予想される。こうした危機からの脱出を目指す方

向として、ロシアでみられる一つの傾向は、民族を越えた愛国心の高揚であり、大国ロシアの復権である。これを単純に、ロシア民族のナショナリズムと割り切ることはできない。

愛国心を通じて国家の共同性が復権するためには、脅威とまではいかにせよ、ある程度の対外的な緊張関係が必要であろう。そうした条件はNATOの拡大をめぐる動きをみる限り、整いつつあるように思える。戦間期の東欧で、チェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアが成立し、ある程度の期間存続しえたのは、革命ロシアの存在によるところが大きかったからであろう。このことは、多民族国家が国家として成立しうる重要な条件の一つに、対外的緊張関係があることを示唆しているのではないだろうか。ちなみに、EC統合の気運が高まった背景に、アメリカと日本の強い経済力に対する危機意識があったことは、梶田先生が報告されたとおりである。

お二人のご報告のなかで、民族・エスニック紛争について考える際、分離と統合を二律背反的ではなく、いわば表裏一体のものとして把える視点が必要であるという指摘がなされた。とりわけこの視点は、ヨーロッパの地域主義Ⅱ分離のヴェクトルが、EUという国際社会Ⅱ統合のヴェクトルと結び付いているという現象を理解するうえで重要であると思う。ただ、ロシアあるいはCIS諸国を念頭に置く限り、国家を越えた広域国際社会への統合が、普遍的妥当性をもつといえるのか、疑問なしとしない。たしかに、さきほど述べた環日本海経済圏をめざす方向が萌芽的にはみられる。また、CIS諸国には経済的再統合の動きもある。しかし、CISの再統合の動きについては、それはロシアや他の共和国内での多元的統合とは必ずしも連動していない。ヨーロッパにおけるように分離と統合が結合するためには、一定の社会的・経済的条件が必要であり、それらの条件それ自体が、分離を図る主体あるいはそれぞれの国家レベルに（国民の政治文化などとして）固有のものとして存在しているのではないだろうか。

梶田先生のお話しに関連してお伺いしたいことは、地域主義の主体が、はたして西ヨーロッパという広域社会にア

イデンティティーをもちうるのか、もちうるとすれば、いかなる条件のもとでなのか、という問題である。一般的に、自分たちを抑圧している（あるいは、抑圧しかねない）政治権力は、できる限り自分たちから遠ざけたいと願うのは、マイノリティ集団が共通してもつ自然な感情であろう。その際、そうした政治権力を越えたレヴェルに新たな政治権力が生まれつつあるとき、マイノリティ集団が、中間に位置する政治権力（すなわち国家）を越えて、新たな政治権力（すなわち広域国際社会）と結合しようとする動きを示すことも不思議ではない。この場合、いわば、マイノリティ集団は、国家からの分離の手段として広域国際社会と結びつくわけである。しかも、広域国際社会がマイノリティ集団に何らかの利益（公的資金の優先的配分など）を提供するならば、マイノリティ集団の国際社会志向は一層強まるであろう。西ヨーロッパにみられる分離と統合の結合に、このような一般的なメカニズムが大きく働いているとすれば、さきほど述べたアイデンティティーの問題が重要になってくると思われる。この点について、どのように考えればよいのだろうか。

また、木戸先生が指摘されたように、旧ソ連邦における民族問題の最大の特徴の一つは、民族問題が経済問題と密接に関連しており、限られた価値・資源、パイをめぐる抗争が民族対立という形をとって表れている点にある。これは、国家への忠誠と、国家による稀少価値の配分が公正になされているという信頼とが結び付いている以上、当然の現象である。国家によって稀少価値の配分が公正になされていないという被害者意識が強くなれば、人々は国家への忠誠心を失い、アイデンティティーの対象を他に移しかえることになる。こうした事情は旧ソ連邦に限られない。

西ヨーロッパにおけるエスニック運動や地域主義が、地域間の文化的差異に加え、経済的格差を背景にして成立・発展していることは、すでにご報告のなかで強調されたとおりである。そうであれば、稀少価値の配分に関して、ある集団が自分たちは相対的に価値剥奪されているという被害者意識を強くもてばもつほど、エスニック運動や地域主

義は、一層激しさを増すことになる。国家レヴェルでみられるこのメカニズムは、EUレヴェルについても当てはまろう。違う言い方をすれば、EUレヴェルにおいても、パイをめぐるゼロ・サム関係の紛争が深刻化すれば、統合の基礎が揺らぐことにならないだろうか。

以上、きわめて雑駁な議論で申し訳ないが、私は、ネーションのもつ二つのベクトルという一般的な視点から、旧ソ連邦および東欧における民族問題と、西ヨーロッパにおけるエスニック問題とを、共通する性格をもつ問題として論じてみた。そして、これに関連していくつかの点を質問させて頂いた。旧ソ連邦・東欧と西ヨーロッパの民族・エスニック問題をどのような視点で比較・検討すべきか、さらに考えなければならぬ問題であると思う。